

# 心に響いた熱い思いと言葉・感動の拍手 健全育成主張大会・標語表彰



▲賞状を手にする発表者と標語入賞者のみなさん

第25回只見町青少年健全育成主張大会・健全育成標語入賞者表彰式が、1月29日に朝日地区センターで行われ、将来の夢や希望、今の考えなど、発表者の気持ちが込められた熱い言葉に感動の拍手が送られました。

## 標語入賞作品

(敬称略)

部門	賞名	標語	所属	氏名
小学生の部	優秀賞	通学路 笑顔で見守る 地域の眼	明和小学校6年	き とう き 齋 藤 咲 希
	佳作	ありがとう 言える気持ちを大切に	只見小学校6年	め ぐろ つばき 目 黒 翼
	佳作	ありがとう 笑顔たくさん 只見町	朝日小学校6年	き づ ゆう ま 吉 津 悠 真
	佳作	かなえない 大きな夢を 目標に	明和小学校5年	きく ち み ゆう 菊 地 美 結
中学生の部	優秀賞	明日への 希望をもって 一歩ずつ	只見中学校2年	ば ば こう へい 馬 場 康 平
	佳作	ボランティア 未来の只見 守るため	只見中学校1年	き かい こうたろう 酒 井 康太郎
	佳作	手をつなぎ 共に歩もう 夢未来	只見中学校3年	い づか たく ま 飯 塚 拓 真
	佳作	大切に 自分の命 一つだけ	只見中学校3年	わた なべ み き 渡 部 美 咲
高校生の部	優秀賞	おかえりと 迎える声の あたたかさ	只見高等学校1年	ほし かな み 星 花那美
	佳作	故郷から 離れて感じた 大切さ	只見高等学校1年	かん け ゆう な 菅 家 祐有奈
	佳作	再確認 親への感謝 忘れずに	只見高等学校2年	まず きの もえ 鈴 木 萌
	佳作	「ありがとう」 伝えていますか? この言葉	只見高等学校2年	いち じょう さやか 一 条 さやか
	佳作	ひきつごう 地域の伝統 いつまでも	只見高等学校3年	かき や か おり 関 谷 香央里
一般の部	優秀賞	辛い時 心を癒す 家族愛	福 井	わた なべ み き こ 渡 部 美紀子
	佳作	あせらずに 我子の成長 信じよう	蒲 生	た なか ケイ子 田 中 ケイ子
	佳作	人と人 いたわる心 愛の町	只 見 ・ 沖	かん け のり こ 菅 家 のり子

主張大会では、小学生3名、中学生3名、高校生2名が、今思っていること感じていること、体験したことなどを心を込め発表しました。その熱い思いが約70名の来場者に伝わり、発表者の言葉に感動されていました。

続いて行われた標語入賞者表彰式では、青少年健全育成町民会議会長の目黒町長が、出席された入賞者一人一人に賞状と記念品を贈りました。標語には291点の応募があり、どれもすばらしいものでした。

主張大会での発表内容と、標語の入賞作品を紹介します。ぜひ、ご覧いただき、健全育成にご協力をお願いします。本事業は、町民の皆さんからの協賛金により実施されています。

# 医者になりたい



只見小学校6年  
馬場 真樹くん

祖父の心臓は止まり、肌は白く冷たくなっていった。僕は祖父のそばでぼう然としていた。

僕の祖父が昨年の十月に死んだ。大腸がんが肝臓に転移したためだという。二週間前まで家にいて、僕の目の前にいた人がもうこの世にはいない。ぼくはどうしようもなく、ただその場にいるだけだった。だがこれが現実だ。生き物はいつか「死」という終わりを迎える。僕は（なぜ生き物には死があるのだろう）（死なない生き物はいないのだろうか）そんなことを考えていた。しかし、くよくよしていてもどうしようもない。祖父はもうこの世にはいないのだ。

祖父の死は、僕にとってとても大きな出来事だったが、そこから得たこともある。それは「医者になりたい」という夢が大きくふくらんだことだ。

僕の祖父は八十二才まで生きたが、病気や事故などの事情で日本人の平均寿命である八十才に届かずに死を迎え

る人も数多くいる。だからこそ僕は、（医者になりそのような人達の人生を少しでも長く延ばせるように手助けしたい）、そう強く心に思った。

医者は病気やけがに苦しむ多くの患者の痛みを和らげ、助けることができる。そしていくつもの尊い命を救い、その家族にも幸せを与えられる素晴らしい職業だ。その一方でデメリットもある。それはミスが許されないことだ。どんな職業にも失敗はつきものだ。人間がすることである以上、体調や気分など様々なコンディションによって失敗はつきまとうものだが、医者には許されない。言い訳は許されない、できて当たり前前回の厳しい世界だ。もしも自分の担当した手術が失敗すれば患者の病気が治らない。それどころか患者の負担が前よりも増し、苦痛を与え、死に追いつめてしまうかもしれない。

もしも僕が医者になり、誤って患者を死なせてしまったとしたらどうすればよいのだろうか。「自分のミスが原因で

患者の人生を終わらせてしまった」と自分を責めるかもしれない。患者にどう説明し、どう対応すればよいのだろうか。今の自分にはまだその答えは見つからない。今の自分に足りないものは、実は心の弱さなのかもしれない。

自分の理想とする医者は、患者を第一に考える医者だ。金や名声が目がくらむ医者は本当の名医ではないと思う。しかし、気持ちだけで患者は救えない。果たして自分が、理想とする医者になれるのかどうかはとても不安だ。医者には確かな知識と経験が必要だ。専門的な知識と技能を得るためには進学を本気でめざす高校や大学に行かなければならない。そのためには今の勉強をひたすらがんばらなければならない。毎日のんびりとテレビを見たり、ゲームをしたりしている場合ではないのだ。医者になるという目標をもったらさけては通れないことだ。

医者になるには、勉強だけでなくチャレンジ精神も必要だ。経験を通していろいろなことを得るには、何事にもチャレンジしようと思わなければならない。どんな名医でも、最初は研修医というゼロからのスタートだ。どんなこともチャレンジしてみなければ何も始まらない。普段の生活でも、やる前からあきらめる自分とは決別しなくてはならない。失敗こそが豊かな経験なのだから。

現在の日本の医療には問題点もあると思う。それは無医村地区があることだ。只見町にも診療所はあるが病院は

ない。住んでいる住所によって助かる命が助かりにくい場合もあると聞く。人間の命に重いも軽いもないはずだ。医者がいない地域でも病人やけが人は必ずいる。僕がもし医者になったら、都市部だけでなく、もっと広いところまで視野を広げなければならないと思っている。

世界にはやりたいことがあってもできない人がたくさんいる。今、僕はやりたいことがあればだいたいのは、チャレンジできる環境にある。やりたないことがあるのに、それをやろうとしない人がいるとするなら、それはおろかなことだと思う。僕には今、将来やりたいことがはっきりと見えてきた。あとはその目標に向かってどんな努力をしてどんな経験を積みばよいのかを考えなければならぬ。将来の夢に向かって、僕の心と頭をきたえなければならぬ。昨日の自分にさよならをして、新たな目標に向かってがんばる自分に出会わなければならないのだ。

この世に不可能なんてない。「やりたいことを見つけ、それに思いきってチャレンジする」。それが一番大事な事なのではないだろうか。だからこそ僕は、夢であり目標でもある「医者」になりたい。それが僕を大切に育ててくれている家族と、今はなき祖父への恩返しなのだ。僕は今、勇気と希望をもって将来の夢への第一歩をふみ出し

# 私の夢



朝日小学校6年

ほし かずほ  
星 一穂さん

「一穂は看護師さんになったら。」  
これは、私が四歳のときの母の言葉です。

そのとき私はまだ幼かったので、やりたいものといったら、セーラーマンのように、悪者を倒す正義の味方でした。そんな私への、「看護師になったら」という母の言葉。私は、母の思いつきも分からず、ただなんとなく、「うん、分かった。」と答えています。

去年、国語の授業で、読書紹介をする学習がありました。私が紹介した本は、「野口英世」の伝記です。この本は、母が私にすすめてくれました。

私はそのとき、母に、なぜこの本をすすめたのか聞いてみました。すると母は、私が小さい頃大やけどをしたことを話してくれました。

私が大やけどをしたのは、一歳のときです。母は台所で、熱湯の入ったやかんを持っていました。そのとき、母がやかんを落とし、母の足下にいた私

の体に熱湯がかかったのです。お湯は、肩から全身にかかりました。私は泣きわめき、母はとにかく、私の体にずっと水をかけ続けました。そして

「ごめんね。ごめんね。」と、泣きながらあやまり続けたそうです。

私の皮膚は、ペロンペロンにはがれたほどの大やけどで、診療所では治療ができないと言われました。そこで、救急車で別の大きな病院に行き、治療をすることになりました。

私が治療室に入ってしまったと、母は、私の様子が分からず、とても不安でこわかったそうです。でも、そのとき、母の心の支えになったのは、看護師さんたちでした。看護師さんは、何度も母のそばに来て、

「大丈夫。娘さん、がんばってますよ。」と優しく励ましてくれたそうです。

治療は無事終わり、予定では三カ月の入院だったのですが、なんと二週間で退院することができたのです。

今では、そんな大やけどをしたとは思えないくらい、傷あとはうすくなり、ました。でも、障害が残るかもしれないと医者に言われた母は、とてもこわかったと思います。それに、自分の不注意のせいだと、自分をとても責めたことと思います。でも、そんなとき、いつも優しく励ましてくれた看護師さんたちのおかげで、母の不安だった心はやわらいでいったのです。

この話を聞いて、私は、看護師という職業は、病气やけがの治療をするだけではなく、つらい思いをしている人々に優しく接し、勇気を与えてくれるすばらしい職業なんだと感じました。私は、母が、

「看護師さんになったら。」と言ってくれた気持ちが分かった気がしました。

私は今、毎日を元気いっぱい過ごしています。でも世の中には、病气やけがに苦しんでいる人がたくさんいます。私は看護師になり、そのような人の心を支えながら、病気を治す手助けをしたいと思うようになりました。

そのために、今私は、友達が困っているときは声をかけたり、友達と協力して活動したりすることを心がけています。また、誰に対しても優しい気持ちをもって接し、一生懸命勉強もして、看護師になるという私の夢が実現するよう、がんばりたいと思います。



# 転校を通して分かったこと

明和小学校6年

さいとう 齋藤  
さき 咲希さん



「どうしても転校しなくちゃいけないの。」

五年生の十月、明和に引越し、学校も変わると聞いた時、私は信じられない気持ちでした。

「転校」。私の頭に浮かんだものは、保育所から、ずっと一緒だった友達や大好きな先生との別れでした。(卒業まで後一年。みんなと一緒に卒業したい。)(鼓笛隊のトランペットだって、新しく入ってくる下級生に教えられる

ように、昼休みも進んで練習してきたのに。途中であきらめたくない。家を引越してからは、信じられなかった転校が現実と考えられるようになり、また。だから休み時間は友達といっぱい遊びました。友達が聞いてくれたお別れ会は、優しさがたくさん詰まっています。

三学期に入り、明和小での学校生活が始まりました。自己紹介はできただけ、自分から話しかけることができません。(仲良しになるには、自分から話しかけよう。)私は、いつもよりはしゃいだ声で話したり、乱暴な言葉をつかったり、ふざけていたずらをしていました。

一週間経って、私は担任の先生に呼ばれて二人で話をしました。先生の話から、自分の乱暴な言葉が友達を傷つけていることや、私のいたずらを正しくないと思っている人がいることを知りました。先生は、

「みんな咲希ちゃんが来るのを楽しみにしていたんだよ。」とおっしゃいました。私は、それまで無理をして明和小に慣れようとしていました。でも、友達はそのままの私を待っていてくれたことを知ったのです。目から涙がポロポロ流れました。

この時から、私は明和小の一人になろうと心に決めました。明和小には初めてのことがたくさんありました。

まずクロスカントリースキーです。みんなは四年生から練習を始めていたので、スイスイと上手に滑っています。

靴をスキーに留めることも歩くこともできないのは私一人です。早く滑れないけど、必死でみんなを追いかけました。人一倍多く転びました。同級生や上級生が私を追い越す時、

「咲希ちゃん、がんば。」と声をかけてくれました。少しずつ上手になるように、一人、二人と話せる上級生も増えてきました。

クロスカントリースキーが終わると、私達五年生にはまた一つ、大きなハールドルがありました。それは六年生に感謝の気持ちを伝える「卒業生を送る会」を開くことです。全て自分たちで考えて協力しながら進めなくてはなりません。私は、すぐに飾り係に立候補しました。昨年の写真を参考に、今年はどうなふうにしよかと係で話し合いました。そして体育館いっぱい運動会の万国旗のようにメッセージをつり下げ一年生から五年生まで一人一文字ずつ書いてもらうことにしました。完成

できた時クロカンでお世話になった六年生に恩返しできた気がしました。六年生になった私は委員会の委員長に立候補したり、行事にも積極的に参加したりしました。そのうちに下級生の友達も増えていきました。明和小では年上の人に「兄(にい)」とか、「姉(ねえ)」をつけて呼びます。「咲希姉」と呼ばれると初めはピンときませんでしたがだんだん慣れていきました。運動会では紅組の応援団長もしました。ちょっぴりはずかしかったけど、とてもいい思い出です。

転校してさびしいと思ったことはありましたが、転校したから分かったこととがあります。それは友達の存在の大切さです。前の学校での思い出はずっと私の心をはげましてくれました。そして明和小の友達は今までとちがう自分を発見させてくれました。新しいことに挑戦することに、自信がもてたのです。しかしそれは私一人ではなかったとではありません。先生や友達、両親

の支えがあったから変わったのだと思います。改めて「ありがとう」と言いたい気持ちです。今年もクロカンの季節がやって来ましたが、優勝は大きな目標ですが、明和小の六年生としてクロカンの伝統を下級生に伝えるため一生懸命練習していきます。

また一つ明和小の思い出を増やして卒業したいと思っています。

## つながりのある町



只見中学校1年

めぐる たいせい  
目黒 大成さん

ちょっとした買った買い物でも車を出さなければ行くことができない。「セブンイレブンに行く」のは、心がはずむイベントです。電車は一日に数本、路線バスは廃線になってしまいました。私たちの町「只見町」は典型的な田舎の町です。少子化・過疎化が全国的にも問題視されていますが、「只見町」もまさしくそのとおりです。若い人たちは進学や就職を機に都市へ出て根をおろしてしまうのがほとんどです。生活するうえで不便さを考えると、しか

たのないことなのかもしれませんが、出て行く方も見送る方も、とてもさびしいことだと思えます。

只見中学校は、統合から三年間は一年二学級でしたが、今年度から二年生が単学級となってしまいました。町内の小学生の数を見ても、全学年が単学級になるのは、そう遠くないことだと思えます。

確かに、先ほどいったような不便さでは、若い人たちが返ってこないのしかたがないのかもしれませんが、この

まま若い人たちが減ってしまおうと、今、若い人たちも行っているトマト栽培までも、後継者問題が出てきてしまっています。

果たしてこのままでよいのでしょうか。只見にもよいところはたくさんあります。魅力の一つ目として、まず挙げられるのは「自然の豊かさ」だと思います。世界遺産級のブナ林はいうまでもありませんが、この地に住んでいるために気づかない魅力的な自然が、他にもあると思います。川を魚が泳ぐことすら珍しい都会とは比べものにならないと思います。開発することにお金をかけるのではなく、この貴重な風景を維持するために予算を費やすべきです。この自然を認める人は、都会にもたくさんいると思います。そういう人たちを受け入れることができれば、きっと町も活気づくことではないでしょうか。二つ目は、地域の人たちとふれ合う機会がたくさんあり、地域の人たちとの輪ができていくところです。都会では、隣にどんな人が住んでいるのかわからないといわれている中、私の近所の人たちは、私がどこの目黒さんちの子か、さらに何部に入っているのかも知っています。また、朝会うと、「おはよう。がんばれよ。」と声をかけてくださいます。みんな心が広く、みんな親切です。学校行事にも、子どもや孫が在学しているということに関係なく、多くの人が参加してくださいます。また、困っていると必ず手を差し伸べてくれます。田舎だからできることがあります。

不便だからこそ、地域の人たちとの団結力は、とても大きいです。

今、日本は六十五歳以上のお年寄りの数が二割を超え、世界で一番の長寿国となっています。只見町も、六十五歳以上の方の比率は、かなり高いはずですが、このまま大好きな只見の風景を、大好きな只見の人たちを守るために、私たちができることは、地域のつながりを感じ、大切に思うことだと思っています。自分も地域の一部なんだという自覚を持ち、先祖からおじいさん・おばあさん、おじいさん・おばあさんからお父さんお母さんへと受け継がれてきたバトンをしっかりと握って、次の世代に渡していかななくてはならないと思います。しかし、ただ受け取って渡すのではなく、自分たちなりにアレンジを加えて、新しい風を吹かせながら。みなさんも、今住んでいる場所が好きですか。愛着はありますか。次は私達が担っていく番です。責任を持って只見を担っていきましょう。



# チヨコレートから考える



只見中学校2年

鈴木 沙和さん

今、私たちは不自由のない生活を送っています。学校に行って勉強やスポーツをして、帰ると家族がむかえてくれて、食事也十分にとって、好きなことをして。こんなあたり前のことに感謝しているかと聞かれると、決して『はい』とは言えません。

そして、世界中の人々全員がこのような生活をしているかというところとは言えません。発展途上国では学校に行けず働かなければならない子どもがいたり、戦争で義足になったり家族を失ってしまったり、食べ物が足りずに栄養失調になったり、死んでしまう人もいます。これらの国では三秒に一人が死んでいるというデータがあります。三秒に一人といいますが、一日に二万八千八百人が死ぬことになりまます。また、世界では小学校に行けない子どもが一億三千万人、働いている十歳以下の子どもが二億五千万人もいます。このデータを聞いたときには、何とかしたいと思いますが、すぐに別

のことに頭がいつて忘れてしまいます。

以前授業で、カカオの農園で働く兄弟のことを映したドキュメンタリーを見ました。カカオの木に登って実を摘み、集めるという仕事です。カカオは大人がやってもとれないほど、もぐことが難しく、木から落ちてケガをしようともあるそうです。彼らの母親は病気なので、彼らが働かなくてはならないのです。弟の方が、

「学校に行きたい。学校で勉強してお母さんの病気を治すお金をかせぎたい。」と言っていました。私は、勉強をあまりしないので彼の言葉にすごく感動しました。誰かのために小学生くらいの子どもが勉強を頑張るなんて絶対に言えないと思うからです。ましてや今から働けといわれても、私はそうできなないので、彼らはすごいと思ったからです。

テレビスタッフに兄の方が、「これが僕の宝物だよ。」と一本のぼろのボールペンを取り出しました。

ボールペンなんて日本では百円出せばすぐに買えるけれど、この国ではめったに手に入らないのです。しかも、ぼろぼろになるまで物を使いこんだことは私にはないので、同じ世界の子どもたちにもこんなに差があつていいのかわかりませんでした。さらに見ていくと、彼らはカカオがチョコレートになることを知りませんでした。ガーナのカカオは九割が日本に輸出されているので、ひよつとすると私はこの兄弟のつたカカオからできたチョコレートを食べているのかもしれないと思いました。そしてかなり悲しくなりました。

しばらく見ていくと、番組の中で『フェアトレード』という言葉が出てきました。どんなことかというところ、農作物が悪い業者に安く買収されてしまうことが多いので、農家の人と直接取引を引きをして、きちんと農家の人にお金がわたるようにしようという動きのことです。私は、世界が貧しい人々を救うために動き出しているのだと感動しました。けれども、フェアトレードだけではこれらの問題は解決しません。それに、まだフェアトレードになっていない農家もたくさんあると思います。問題は山積みです。医療のことや技術もまだまだ発達していないし、無理に発展させようとすると公害が起るかもしれない。

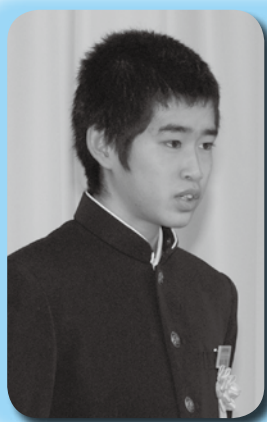
今、チョコレートを食べると彼らのことが頭に浮かんできます。そして彼らのために何ができるか口の中で食べながら考えます。

今できるようなようになるために、もっといろいろなことができるようになるために、もっともつといろいろなことを知って実行していけるようになりたいです。

## ゆとり世代に 生まれて

只見中学校3年

鈴木 宏汰さん



私たちは、義務教育のほとんどを『ゆとり教育』の中で生活してきました。私たちには初めからそうだったのでピロときませんが、以前、土曜日は学校が休みではなかったそうです。ゆとり教育の中で私たちは授業を受けてき

ました。そして今、ゆとり教育は見直されようとしています。さまざまなメディアで「学力低下」とか「授業内容が増える」などと報道されています。では、なぜ『ゆとり教育』は始まったのでしょうか。その背景にあるのは、以前の教育は知識ばかり教えていて、考える力がついていなかったのでは、という反省です。そして、つめこみ教育、管理された環境に置かれて、と感じてしまい発生した、いじめや暴力などの社会問題でした。

そこで考える力を伸ばし、時間的にも精神的にも余裕を持たせることを目的に始まったのが、ゆとり教育という政策でした。それが原因かはわかりませんが、学力低下などを理由に、再び元に戻すことになったのです。

今は悪い面だけがとらえられていますが、果たしてゆとり教育とは悪い面だけだったのでしょうか。実際に学力が落ち込んでしまったのですから、批判されるのはしかたないのかもしれませんが、私にとっては有意義だったと感じています。勉強があまり得意ではない私にとっては、これ以上勉強する内容が増えたら、授業についていくのが精一杯になってしまいました。

今、私の学校では特定の教科に限って、習熟度別にコースに分かれて学習しています。自分の進度に合った学習を、同じくらしいレベルの仲間とできるのです。授業を受けていてしっくりくるような感じがします。このような学習も、詰め込み式の学習になってしま

たら、一時間黙ってわからない授業を聞いているだけになってしまいます。とはいえ、学力が低下していると聞かされると、やはり不安になります。これからの中学生が習うことの中に、私たちが習ったことのない学習内容が出てくるのです。何か損をしたような気分にもなります。

しかし、学ぶという言葉がさすのは、机に向かって勉強するだけではないことを、私は感じています。社会に出たとき大切なのは、勉強だけではありません。人とのつながり、意欲、挑戦、あいさつなど、大切なことはまだまだあると思います。これらの基礎を、只見中学校の生活を通して学んできました。返事やあいさつができなければ、野球の試合になりません。何事にも挑戦する気持ちがないと、自分自身の成長はありません。また、相手を思いやる心がなければ人の輪の中には入っていけないのです。机に向かってやる勉強では、とうてい身につかないことです。実際に試して、感触をつかむことがとても大切なことだと思ふのです。万が一、失敗して相手にされなくても、改善策を生み出すカギが見えてくるはずだと思います。

私たち中学三年生は、これからそれぞれに進路に向かって、歩き出そうとしています。義務教育九年間の中では、さまざまな場面に遭遇しました。そのたびに悩んだり、友だちと励まし合ったりしました。壁におち当たったとき

の解決のしかたは、その都度、先輩や先生方に教わってきました。ゆつくり立ち止まって、深く考えて自分なりの最善の方法をとれるようにしていきたいと思いをもちます。

# みんなに優しい社会の 実現に向けて



只見高等学校1年

さいとう 未来さん  
齋藤 未来さん

「みんなに優しい社会」の実現に向けて、私はノーマライゼーションの考えが必要であると思います。ノーマライゼーションの理念は、障がいのある人をノーマルにするということではありません。障がいの有無、教育、労働などの生活条件を可能な限り障がない人と同じようにすることです。また、障がいの有無に関わらず、自分のライフスタイルが主体的に選択できる社会を目指しています。ノーマライゼーションは、現在は、障がいの有無だけではなく、年齢、性別、人種、国籍などの違いに関わらず、すべての人が同じような生活条件で暮らせることも意味する言葉です。

の1つです。従来、社会環境の整備や商品設計などは、一般的に健常者に合わせて行われ、障がい者などにとっての利便性は考慮されてきませんでした。これに対し、高齢者、障がい者等が社会生活をしていくうえで障壁となるものを除去するという考え方がバリアフリーなのです。現在、その考え方に沿って取り除くべき四つの壁が指摘されています。それは、物理的障壁、制度的障壁、情報面での障壁、意識上の障壁（心の壁）です。

でも対象としてバリアフリー化を義務づけるバリアフリー新法が成立しました。この法律によって、駐車場や道路なども含めたバリアフリーが推進されています。

次に制度的障壁とは、様々な資格、免許等の取得が、障がいを理由として制限、禁止されていることを指します。障がいを欠格事由とした法令には問題があるとして、一九九九年に一斉に見直しが行われました。

情報面の障壁では、音響式信号機や音声案内の導入、手話通訳者の養成、点字表記、字幕放送の普及などにより、障壁を無くす取り組みがなされています。

意識上の障壁とは、心ない言葉や視線、障がい者を庇護されるべき存在としてとらえるなどといったことを指し

ます。これに対し、学校教育や地域活動などにおける広報啓発活動により、バリアフリーの考え方を普及させる取り組みが行われている他、ボランティア活動による理解促進が行われています。

このように、障がいの有無や性別などに関わらず、すべての人が共に生活できる条件を整える「ノーマライゼーション」の実現に向けて、「バリアフリー」という考え方が大きなカギを握ると私は考えます。未だに課題は多く残っていますが、高齢者や障がい者を施設に入れて切り離すのではなく、すべての人が生活できる社会を目指すことで、ノーマライゼーションが実現し、「みんなに優しい社会」に近づくのではないのでしょうか。



▲標語（小学生の部）優秀賞「齋藤咲希さん」



▲標語（一般の部）優秀賞「渡部美紀子さん」

# 少子高齢社会対策について



只見高等学校2年

やまい まさみ  
山井 雅美さん

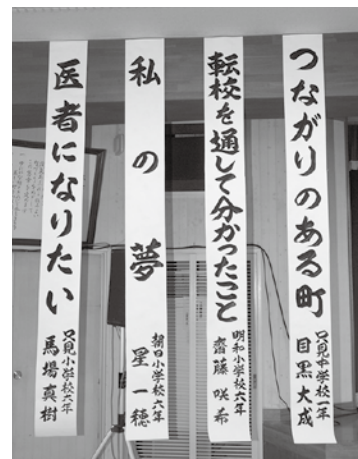
現在、日本が抱える深刻な問題の一つに、少子高齢社会が挙げられます。二〇〇七年には、六十五歳以上の高齢者が人口に占める割合が二十一・五パーセントになり、完全に高齢社会と言える状況になっています。元来長寿国と言われ、さらに医療技術が発展している日本では、この先も高齢者は増える一方であり、その結果、労働力人口の減少、年々増大する医療費の負担などが課題となってきました。こうした課題を解決するために、私は、少子化問題への対策に重点を置くことがよいと考えます。

少子化の原因となっているのは出生率の低下です。第一次ベビーブーム時には、女性が一生に産む子どもの数、すなわち合計特殊出生率は四・五以上の高い値を示していましたが、二〇〇九年には、一・三七にまで減少しています。出生率を上げるためにまず提案することは、職場での出産育児に関する制度の見直しです。出産、育児にあたり、産休、育休を利用する女性は多いのですが、人手が足りていない職場ではその制度を利用しづらい場合があります。さらに育児介護休業法で子どもが一歳になるまでは休暇がとれるようになっていますが、一歳までというのはあまりにも短いと思います。産休、育休を利用しやすい環境を整える。例えば、育児介護休業法の一歳までという期間を、小学校入学までに改善する。以上に加え、出産後も元の職場へ戻れるような保証を会社側でとれば、社会復帰が不安で出産をためらっていた女性も、安心して出産することができるようになります。

次に提案することは、家事や育児を女性任せにせず、男性にも協力してもらうことです。普段の家事に育児が加われば、女性にとってかなりの負担になります。日本の男性の家事、育児に費やす時間は世界的に見ても最低の水準となっており、男性の家事従事率の割合が低いと出生率も低い傾向になる

というデータがあります。政府は、エンゼルプラン、新エンゼルプランなどで保育所を増やしたり、社会全体で育児を支援しようとしています。しかし、家事労働の分担という動きがなければ、出生率増加にはつながりません。未だに家事や育児は女性がすることという意識が男性には根強く、家事は女性の仕事といった風潮が根強いのも事実です。こうしたことも少子化の一因ではないでしょうか。この意識を無くすためにも、男性の育児休暇を職場で推奨するといった動きが必要です。出産する当事者である女性の立場での対策が重要なのです。

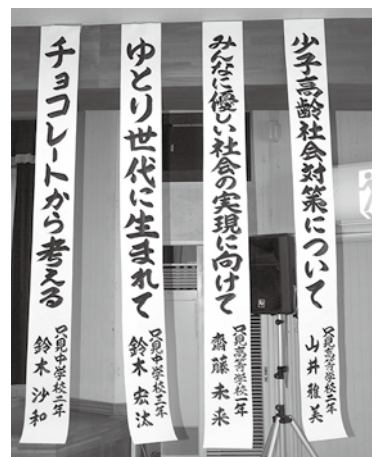
職場での出産、育児に関する制度を見直す。家事や育児を男性に協力してもらおう。こうした対策をとることで少子化の進行を止めることができると思います。そして少子化の進行を止めることで社会を支える若者が増え、高齢社会問題も解決につながるのです。



つながりのある町 只見中学校2年 目黒大成  
 転校を通して分かったこと 明和小学校6年 齋藤咲希  
 私の夢 朝日小学校6年 星一穂  
 医者になりたい 只見小学校5年 馬場真樹



▲来場者の前で思いを話す発表者



少子高齢社会対策について 只見中学校2年 山井雅美  
 みんな優しい社会の実現に向けて 只見中学校2年 齋藤未来  
 ゆとり世代に生まれて 只見中学校2年 鈴木宗汰  
 チョコレートから考える 只見中学校2年 鈴木沙和